

第50回 日本脊椎脊髄病学会学術集会

会 長 根尾 昌志 (大阪医科薬科大学医学部 整形外科教室 教授)
事務局長 中野 敦之 (大阪医科薬科大学三島南病院 整形外科 特務准教授)

2021年4月22日(木)から24日(土)の3日間、国立京都国際会館において第50回日本脊椎脊髄病学会学術集会を現地開催いたしました。私の専門分野である脊椎脊髄病領域では日本で最大の学会です。新型コロナウイルス感染の第4波にまともに見舞われ、感染者数が鰻登りの中での開催ということで、現地は13会場予定をメインの4会場に縮小し、4月28日(水)から5月11日(火)まで全演題をオンデマンドで配信いたしました。学会が終了するまで、ハラハラドキドキの毎日でしたが、皆様の多大なご協力を得て無事終了しましたことをご報告するとともに、心から感謝申し上げます。

テーマは第50回という大きな節目の学術集会であることを鑑みて「レジェンドを知る レジェンドを創る」といたしました。(図1)日本の脊椎脊髄病学の歴史を振り返り、その歴史を創ってきた「レジェンド」の皆様にご講演いただき、それをこれからの日本を担っていく「未来のレジェンド」の糧にしてほしいという思いからです。歴代会長のうち、当教室の小野村敏信名誉教授を含む今も大変お元気な24名の先生方にお声がけしたところ、全員がこのテーマの主旨をご理解くださり、教育研修講演、シンポジウ

ムなど学会のどこかでご講演いただくことができることになりました。中には、本当に久しぶりに学会に参加するという先生もおられ、歴代会長以外のレジェンドの先生方も合わせて錚々たるメンバーが講演されるプログラムを組むことができました。これだけの面々が一堂に会することはおそらくもうないと思われました。

また、京都を学会開催地に選んだのは、日本の古都として「伝統、歴史、しきたり」が街に根付いている一方、「自由、知的好奇心、進取の気性」に富む学生の街でもあるからです。「これまでの歴史を背景に、未来を創り上げていく」という学会のテーマに合わせた開催地選択です。京都大学出身で、2019年のノーベル化学賞を受賞された吉野彰先生を記念講演にお招きすることもできました。

人が集まるかどうか不安だった現地開催ですが、実際学会が始まってみると、思ったよりもはるかに多くの現地参加者があり、比較的学会らしい雰囲気になりました。(図2)中には院長



図1：このデザインを表と裏に印刷したチラシを作り宣伝しました



図2：ドイツ、フランスと結んで脊椎のsagittal alignmentに関する国際セッション
いつものメンバーに加え、第4回&20回会長90歳の竹光 義治先生(スクリーン下、現地参加)、肩関節の世界的権威の東北大学整形外科 井樋 栄二教授(右上)など第50回大会ならではの面々



図3：小野村 敏信先生の基調講演

に3回直談判して現地参加の許可を得たという先生や、人込みを避けて、伊丹空港からタクシーやレンタカーで会場に来られた先生方もおられ、感激いたしました。

初日の午後一番は、この学会の目玉企画の一つである第7回および第19回会長を務められた小野村敏信大阪医科薬科大学名誉教授の基調講演「レジェンドを知る –忘れてよいこと・忘れたくないこと–」がありました。(図3) プレナリーセッションとし、日本の脊椎脊髄病学の黎明期のことをお話いただきました。聴衆の誰もが知らない時代のこと、そしてそれを踏まえたインストゥルメンテーション(金属インプラントによる脊椎の固定)に流れがちな現代の治療法に対する93歳の小野村先生のご意見も、皆の



図4：会長講演(左上)、50% distanceですが多くの先生方に聞いていただきました(右下)

心に深く刻まれたことと思います。

それに引き続き会長講演「レジェンドを創る –Magic WorldからSpine Worldへ–」を行いました。(図4) 私が大学生、研修医、大学院生の頃に一生懸命研究していたクローズアップマジックの話から始め、次に基礎研究、そして40歳になってから始めた脊椎脊髄外科の臨床研究の話をお話しました。感受性の強い大学生の頃に、マジックを通して学んだ多くのこと、すなわち面白いと思うことを無我夢中でしていると自然と結果が付いてくること、広い世界を知ることや発表することの大切さ、オリジナリティーが最も大事であること、しつこく続けることの重要性などが、その後の整形外科医としての生活で成果を出すことにつながったことをお話しさせていただきました。そして最後に、その経験を今の大阪医科薬科大学の教室員にも伝えていきたいと努力しており、それに教室員がよく応えてくれていることを示しました。今まで非公開にしてきた、私が実演しているマジックの動画も2本披露したのですが、そのようなことは会長講演でしかできませんので、言いたいことが言えてよかったと思います。

初日の最後にはZoomとなってしまいましたが、吉野彰先生にご講演いただきました。ノーベル賞受賞後、講演依頼が殺到しているため、学会での講演は電池関係の学会に限るとのことでしたので、医学系の学会では当分聞けないお話だったと思います。ただ、直接お会いできなかったのが残念でした。



図5：春の夜風に吹かれる会

最後には「春の夜風に吹かれる会」と称して、全員で国際会館の庭に出て、花火を鑑賞しました。(図5) 学会期間中は天候に恵まれ、花火も盛大で皆に喜んでもらいましたが、もっとも多くのの方々に見ていただきたかったというのが本音です。

2日目、3日目(午前のみ)もレジェンドの講演が続き、結構な盛り上がりを見せました。例年3日目の会場はコロナ前でも少し寂しいことが多かったのですが、今回は最後まで多くの先生方が残ってくださいました。

学会終了翌日の4月25日から京都にも緊急事態宣言が発出されることが学会期間中に決定され、学会前日には「アンラッキーだったね」とか「最悪のタイミングだったね」と慰めてくださった先生方からも「本当にラッキーだったね」と言われました。

結局現地の参加者は833名、トータルの参加者はコロナ前と変わらない2400余名でした。

現地開催中も何人かの評議員の先生から「私は何とか現地に来ることができたけれど、うちの若いもんには許可が下りなかったんだ」という

お話をお聞きました。今回のプログラムは、是非若い先生方に聞いていただきたいという思いで組んだだけにそれが残念でした。レジェンドの肉声、表情などを見て感じていただきたいかったのですが。

一方、私自身はプログラムが重複して現地では聞くことのできなかつた第1から第3会場の講演全てを、どこにも行けないゴールデンウィークを利用してオンデマンドで聴講いたしました。コロナ禍でやむなく採用したオンデマンド配信ですが、現地で聞き逃した講演を後から聞くことができる、よくわからなかったところは聞き直したり何度も繰り返して聞いたりすることができるなど利点も多く、コロナ騒ぎが終わっても、資金さえ融通できればハイブリッドが今後の学会の主流になって行くのかもしれない。

さすがに「やり切った感」はありませんが、あの状況ではベストの学会運営だったのではないかと思います。最後に、学術集会開催をいろいろな面から支えてくださいました大阪医科薬科大学医師会の皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。(図6)



図6：無事終了！ 教室員、スタッフにただただ感謝

第45回 日本口蓋裂学会総会・学術集会

会 長 上田 晃一 (大阪医科薬科大学医学部 形成外科学教室 教授)
準備委員長 大槻 祐喜 (大阪医科薬科大学医学部 形成外科学教室 講師)

日本口蓋裂学会は口唇裂・口蓋裂の治療・予防に関する学術の向上等につとめ、さらに社会福祉に寄与するとともに、会員相互の知識の交換と親睦をはかることを目的として設立されました。1961年に口蓋裂言語治療談話会の発展的解消後に、1970年4月に口蓋裂研究会となり、1976年には現在の日本口蓋裂学会となりました。当初の会員数は293名でしたが、現在は正会員数約3200名となっております。長年、医科・歯科・言語・看護など多種多様な職種の先生方のもとで、口唇裂・口蓋裂やそれらの関連疾患に対する医療を前進させる目的で開催されてきました。

日本口蓋裂学会総会・学術集会は現在年1回開催され、第45回日本口蓋裂学会総会・学術集會を大阪医科薬科大学形成外科学教室で主催することになり、2021年5月20日、21日に宝塚ホテルで開催するように準備を進めました。海外招待講演としてUniversity of Cologne, Department of Orthodontics, Cologne, GermanyよりBert Braumann教授をお招きし、また教育講演として東京医科歯科大学大学

院医歯学総合研究科分子発生学分野の井関祥子教授、大阪医科薬科大学口腔外科学教室の植野高章教授のご講演を予定しました。その他ランチョンセミナー、イブニングセミナー、各種シンポジウム、ワークショップ、さらに一般口演も100題近くの演題登録がありました。昨年からの新型コロナウイルス感染症の蔓延を考慮し、当初一般演題はWEB発表とし、シンポジウムや特別講演のみ現地開催で行うハイブリッド開催を目指しておりましたが、2021年4月25日から6月20日までの緊急事態宣言を受け現地での開催は困難であるとの苦渋の判断のもと、WEBでの発表のみに切り替えて開催をさせていただくことになりました。当日は運営事務局を宝塚ホテルの一室に構え、全ての運営がWEBで行われました。WEB開催が困難な言語ワークショップは残念なことに今回延期となりましたが、その他のプログラムは予定通り進めることができました。特にシンポジウム1「口唇口蓋裂チーム医療(技術革新の恩恵)」、シンポジウム2「Robin Sequenceにおけるチーム医療(技術革新の恩恵)」は参加者の先生方からの質問が尽きることなく、ZOOMでのやりとりになったにも関わらず大変な議論の盛り上がりを見せました。

本学術集會の開催に際し、直前に開催方法の変更を余儀なくされたにも関わらず、運営事務局、学会事務局、座長・発表者・参加者の先生方のご理解・ご協力により円滑かつ有意義な学術集會を開催することができました。また本学集會の準備にあたりましては、当教室の同門会及び関連病院から多大なご支援を賜り、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。



日本アンドロロジー学会 第40回学術大会

会 長 東 治 人 (大阪医科薬科大学医学部 泌尿器生殖・発達医学講座 泌尿器科学教室 教授)

この度、日本アンドロロジー学会第四回学術大会の会長を拝命し、2021年6月12日、13日の2日間にわたり「生きる源、男性力」を学会テーマに開催いたしました。新型コロナウイルスの勢いが収束の兆しを見せない中、オンライン/Webのハイブリッド形式にて開催予定としておりましたが、緊急事態宣言が発令される事態となったため、苦渋の決断ではありましたが完全Web配信としての開催となりました。完全web開催の学会はまさに手探り状態ではありましたが、実際に開催致しますと、若手の先生方を含め多くの先生方が自由に討論に参加して忌憚ない意見交換を交わされ、本当に素晴らしい学術集会となったと思います。

特別講演では、この分野で世界的なエキスパートである順天堂大学医学部附属浦安病院の辻村晃先生に、テストステロンの性機能、生殖機能における役割の総括的レビューをはじめ、最新知見で得られてきた排尿機能とテストステロンの驚くべき相関、さらに近年大きな問題となっている男性更年期症候群(Late-Onset Hypogonadism: LOH 症候群)における研究の最前線を余すところなく90分以上にわたって御講演をいただきました。

教育講演では、「精子の代謝機構と運動パターンとの関係」をテーマに泌尿器科領域講習単位1単位、そして「妻への診療の観点からの不妊治療」をテーマに産婦人科領域講習単位1単位の講演講習を賜り、学会に所属する若手研究者の先生方からの多くの質問を受け大変有意義な講演となりました。

そしてシンポジウムでは、「男性力」をテーマに、がんサバイバーや老年医学における男性力、男性不妊の臨床的視点からのアプローチ研究、

さらにニューロテンシンやセロトニンなど、テストステロン以外にも男性力を決定づける因子群の分子生物学的機能について御講演をいただきました。討論ではこの分野のエキスパートの先生方による活発な意見交換に加えて異分野を専門としている先生方からあっと驚くような意見が飛び出すなど、まさに本学会員の先生方のあつい想いを凝縮した極めて充実した内容のセッションとなりました。

以上、本学会が盛会に開催されましたことをここに御報告させていただきます。これもひとえに本学医師会のご支援の賜物と心から感謝申し上げます。末筆になりますが、本学医師会のみますますのご発展を心よりお祈り申し上げ、御挨拶に代えさせていただきます。

WEB開催
オンライン上での開催になりますので、会場にはお越しにならないでください

会長
東 治 人
大阪医科薬科大学 医学部
泌尿器生殖・発達医学講座
泌尿器科学教室 教授

100th anniversary
OSAKA MEDICAL COLLEGE
1921-2021

日本アンドロロジー学会
第40回学術大会

学会テーマ 生きる源! 男性力

第31回精子形成・精巣毒性研究会 共同開催学会

会期 2021年6月12日(土)・13日(日)

大会事務局 大阪医科薬科大学 医学部 泌尿器生殖・発達医学講座 泌尿器科学教室
〒590-0045 大阪府吹上区吹上2-7
TEL: 072-683-1221(代表)

運営事務局 株式会社PLANNING FOREST
〒540-0075 大阪府中央区東本町1-10-19 住友センタービル5F
TEL: 06-6430-9022 FAX: 06-6430-9033
MAIL: jka40@p-forest.co.jp

第43回 日本光医学・光生物学会

会 頭 森脇 真一 (大阪医科薬科大学医学部 皮膚科学教室 教授)

このたび、第43回日本光医学・光生物学会を2021年7月2日(金曜)、3日(土曜)の両日、大阪医科薬科大学医学部(皮膚科学 森脇真一会頭)、薬学部(医薬分子化学 平野智也副会頭)が主催で開催いたしました。当初は大阪北部の千里ライフサイエンスセンターを予定しておりましたが、新型コロナウイルスの感染状況が全国的に好転せず、最終的には完全WEBでの開催となりました。

本学会は1987年に名古屋市立大学皮膚科の故水野信行教授が始められたもので、会員数は300名程度と多くありませんが、皮膚科医以外に「光」に興味を持つ眼科医、そして生物学、理学、薬学、工学等の専門家も一堂に会して討論するというコンセプトのもと、毎年学術大会が開催されています。

今回の学術大会テーマは、「Let's begin a journey to medicine of light! ~ いざ出

発!!光医学の探検旅行~」としました。例年、学術大会は夏休み前、初夏の時期に開催されています。今回の学会の企画を考え始めた約1年前、当時はコロナ禍が始まり、海や山など旅行に全く行けない状況でした。我々が学会を開催する2021年夏にはコロナ禍が少しは落ち着いていて、withコロナ時代、陽光が降りそそぐ爽やかな浜辺への旅ができることを祈ってテーマを「光医学の探検旅行」といたしました(しかし、この原稿を書いている今、ワクチン接種が進んできてはいますがまだまだコロナ禍が続いている状況です)。

特別講演では東京大学大学院薬学研究科の浦野泰照教授に、光機能性プローブの医学応用についてのお話を、また大阪医科薬科大学内に開設された関西BNCT共同医療センターの小野公二所長に、2020年から保険適応となったホウ素中性子補足療法(BNCT)についての最近の研究成果と今後の臨床展開についてお話し



図1：学術大会HP

いただきました。「光機能分子」に関するシンポジウムを企画し、また一般演題の中から演題をセレクトして、「光を使った新たな治療戦略」と題したミニシンポジウム(UVA1-LED、ALA-PDT、BNCT関連)も企画しました。2日間、招待を含めて計104名の先生にご参加、ご視聴いただき、WEB環境にもかかわらず活発なご討議をいただきました。光医学の最先端の潮流を肌で感じていただき、様々な面から光医学を俯瞰し、異分野からの新たな知見も得て、ご自身の

これからの診療や研究の糧にさせていただけたのではないかと考えております。

今回はコロナ禍、関連企業の圧縮財政もあり、厳しい予算の中での学会開催でした。そのような状況下、大阪医科薬科大学医師会からの助成をいただきましたことを心より感謝申し上げます。



図2：平野智也薬学部教授と一緒にマネージメントを行いました(千里ライフサイエンスセンターにて)。



図3：千里ライフサイエンスセンターに集まった学会当日スタッフ。ニューメディアランドマツバラ様にも多大なご尽力をいただきました(学会のお手伝いもされているようです)。

第63回 日本婦人科腫瘍学会学術講演会

会 長	大道 正英	(大阪医科薬科大学医学部 産婦人科学教室 教授)
事務局長	田中 智人	(大阪医科薬科大学医学部 産婦人科学教室 講師(准))
	田中 良道	(大阪医科薬科大学医学部 産婦人科学教室 講師(准))
	藤原 聡枝	(大阪医科薬科大学医学部 産婦人科学教室 講師(准))
	寺田 信一	(大阪医科薬科大学医学部 産婦人科学教室 助教(准))

2021年7月16日(金)から18日(日)に第63回日本婦人科腫瘍学会を主催致しました。当初は大阪国際会議場で開催予定でしたが“大規模ワクチン接種会場”のため全館使用できず、リーガロイヤルホテル大阪に開催地を変更しました。また、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の感染拡大のため蔓延防止等重点措置が発出され、会場参加とWeb参加のハイブリット開催としました。双方向性のセッションを現地開催のプログラムに組み入れ、また完全事前登録により現地入場者数の調整をして会場での三密を抑えました。Web参加合わせて約2500名の先生方に参加していただき盛会裏に終了しました。教室員を始め関係者の方々のご支援のおかげと心から感謝しております。

近年の婦人科腫瘍の診断・治療薬の進歩には目覚ましいものがあります。約8年前よりベ

バシツマブが進行・再発卵巢癌の治療・維持療法に、またその後進行・再発子宮頸癌の治療薬としても承認されたのを契機に、標準治療の無いMSI-Highを示す固形癌に免疫チェックポイント阻害薬であるペンブロリズマブが認可されました。その後、PARP阻害薬であるオラパリブが、2018年再発プラチナ感受性卵巢癌の維持療法に、2019年初回進行卵巢癌の維持療法にも承認、さらにPARP阻害薬であるニラパリブが、初回進行卵巢癌および再発プラチナ感受性の維持療法さらには4th line以降のHRD陽性症例の治療薬として2020年に認可されました。また、2021年HRD陽性の初回進行卵巢癌にベバシツマブの治療・維持療法にオラパリブ維持療法の上乗せ効果が承認されました。この様のがん医療が進歩していく背景にはtranslational researchが必要です。そこで、本学術講演会のメインテーマを、“次世代がん医療を見据えて～基礎と臨床の架け橋”と致しました。

ハイブリット開催の工夫として、現地に参加できない座長・演者および渡航禁止のため来日できない海外演者にはリモート登壇していただき、会場参加とWeb参加の方々にLive配信で視聴できる様にしました。さらに、現地開催の状況も収録しオンデマンド配信も致しまし



図1：会長講演

た。そうすることにより、通常開催よりも多くの方々に参加していただけることを体感しました。ポストコロナの開催形態としても活用できると実感致しました。

最後に、本学会を主催するにあたり、大阪医科大学医師会の皆様には多大なご支援を賜り心から御礼申し上げます。誠に有難う御座いました。



図2：閉会後の写真